
汗のニオイ

柿原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汗の二オイ

【Nコード】

N2569BA

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

Twitterのプロット作成TLから作成した物語。

ジャンル：恋愛、お題：ファブリーズ、野球部、川

あこがれの甲子園への夢は潰えた。こんなにも虚しく空っぽになるとは思ってもみなかった。全てを野球に費やしてきたせいで、残っているものは何も無い。ただただ部室の中で洗濯していかないユニフォームなどが溜まっているだけだ。

先月の終わり、梅雨の時期に、突然野球部専用の洗濯機が壊れた。同時に各々が自分の家に持って帰りだしたのだが、俺は最後まで他の部活に借りようとして頑張っていたのに、結局それも報われなかった。結局今日、地区大会一回戦で敗退。最後まで洗濯物ができずに溜まりに溜まった負の遺産が、部室の扉を開けた途端、目の前に山となって現れた。開いているゴミ袋に適当に突っ込み、踏んで無理やり押し込み、なんとか一袋分でおさめることができた。部活カバンと同じくらいの大ささになったそれを持ち上げ、自転車置き場へ。もう二度と来ないだろうこのグラウンドがやけに寂しい殺風景に見える。最後に一礼し、とぼとぼと自転車置き場まで歩いた。

家に着いて、すぐさま大きなゴミ袋の中身を洗濯機の中に入れ込んだ。だがさすがに全部は入らない。それほど多かった。残り半分ほど余ってしまったこいつらをどうしようか。悩んだ末にいきついた答えが“ファブリーズでごまかす”だった。自分の部屋に置いておき、ファブリーズでごまかしつつ毎日少しずつ洗濯に出す。一気に出したら親に怒られるのは分かりきっている。いつもは部室で溜まってきた洗濯物にはファブリーズをとりあえずかけているし、今日もいつもどおりにそうすることにした。カバンの中をあさり、プラスチックのあのボトルを探す。だが、いくら探しても見つからない。いつもあの部室の棚の上に置いていたファブリーズがどこにもないのだ。ということとは、部室に忘れたということか。俺は急いで靴を履いて自転車にまたがり家を飛び出した。

もう門は閉まっているかもしれないと思ったが、まだ半開き状態

だったので迷わず構内に入ってみた。秋が近づいているのを肌で感じながら、自転車置き場に自転車を置く。俺の他に二台の自転車が並んで置かれているが、それ以外には見当たらない。それどころか人気も感じない。七月の中旬がこんなにも寂しげなのは初めてだ。自転車置き場のすぐ側にある部屋に向かつて歩いて行く。ここまで来て気付いたが、家の近くのドラッグストアで買っておけばよかった。だが、ここまで来てしまったのだからもう引き返せない。ため息をひとつ吐いてまた向きなおしてみると、野球部の部屋の前に二人の女子生徒がいた。マネージャーの二人だろう。掃除道具を持っているので部屋の掃除をしてくれているのだとすぐに推測できる。いつもいつも献身的にお世話してくれて本当にありがたかったな。最後くらいお礼でも言ってみるか。そんな軽い気持ちで二人に近づこうとしたその瞬間。

「主将だから来ると思ったんだけどねえ」

ん？ 主将？

この野球部の主将は今日まで俺だった。この二人は俺のことを話しているのだろうか。そう思うとなんとなく近づきがたくって、忍び足で部屋の裏側に回った。そつと聞き耳を立ててみると、どうやら俺の噂話らしい。今日打てなかったとかそういう悪口じゃない分まだマシだが、悪いことを話されていないか無駄にドキドキする。すると次の瞬間、衝撃の一言が耳を襲った。

「朝子、最後の告白のチャンス逃しちゃったね」

ん？ 告白？

今、聞いたことのある単語が飛び交ったような気がする。朝子っていうのはマネージャーの一人でなかなか可愛らしい。彼氏がいるっていう噂が流れるまでは野球部のマドンナ的存在だった。その朝子が告白。それも俺の話をしているってことは……。俺に告白？

まさか。そんなまさか。俺なんかどん臭いし打てない名ばかりの主将だ。現に今日も四打席で出塁はデットボールのみ。そんな俺に告白だなんて。何かの間違いだろうか。だとしても嬉しいのは、入

部当初から密かに好意を寄せていたのもある。みんなのマドンナ的存在だったから早くから諦めていたけど。と思うと急に力が入ったと言いか無駄に自分の中で盛り上がりすぎてしまい、壁に勢い良くもたれかかった。するとそばに立てかけてあった金属バットが次々に倒れ、辺りに爽快な金属音が響いた。やばいと心のなかで思いつつどこかに逃げようとするが、部室の裏は一本道。どちらに逃げたつて二人にバレてしまう。苦し紛れに猫の鳴き声の真似をしてみるのが、試合で声はガラガラ。やけに年寄りくさい猫になってしまった。

「なんだ猫かあ……ってやっぱり！ ねえ、朝子！ 来て来て！」
どうやら朝子じゃない方にバレてしまったらしい。朝子じゃない方、すなわち清美は学年でも策士と呼ばれるほど人の恋には敏感に反応し成就させるような人物。いつかは朝子の恋を実らせるんだろうなあとは思っていたが、まさか今とはね。

「あ、高橋君。……お疲れ」

「お、おう。お疲れ」

ぎこちない俺と朝子。昨日まで同じ野球部として仲良くしていたのが嘘みたいに気まずい。そしてそれをニヤニヤと見つめる清美。ますますどうしていいのか分からない。

「じゃ、私、先に帰るね。塾があるから」

やけに塾の部分を強調しながら清美は去っていった。残された俺と朝子はどうしていいのかわからず、しばらく沈黙が続いた。俺は何度も話題を提供しようと思ったが、こういう肝心なときにいつも湧いてこない。いつまでも黙り続けている間に太陽は夕焼けと共に沈み、薄暗いジメジメした部室の裏で蛍光灯だけが光っていた。

「ねえ」

「はいっ」

突然の朝子の声に反射的に反応する俺。咄嗟にお互いの目が合い、緊張感が走る。

「暗くなってきたし、そろそろ帰ろっか」

「そうじゃね。帰ろう帰ろう」

真顔のまま必死に笑顔をつくろうとするもなかなか上手くいかない。どうしようもないまま、二人並んで自転車置き場まで歩いた。

自転車置き場にあった自転車は、俺のを含めて三台。そのうち残っているのは二台。ちよūd俺のと朝子のだった。ということはもう一台は清美のぶんか。残りの自転車が全てなくなった自転車置き場はただただ広く感じる。お互い自転車ながらもなんとなく漕ぎ出すような雰囲気になれなくて、二人で押して歩いて帰ることになった。

川沿いの道を二人並んで歩く。無言で。せつかくだし何か話さないと行けないとは思うが、やはり何も思い浮かばない。思い浮かんだとしても、さっきの俺の話をぶり返すくらいだ。でも沈黙よりはずっとマシかも知れない。そう思い、重い口を開いてみる。

「ちよūtと話、聞いてた」

「……………うん」

これじゃあ会話にならない。意を決して俺は勝負をかけることにした。

「実は、前々から朝子のこと可愛いと思ってた」

「……………うん」

やっぱりダメか。と思った。だが、少し間が開いた次の瞬間、朝子は素つ頓狂な声を上げた。

「えっ!?!」

蝉時雨と川の流れるさわさわという音だけが二人を包む。

「いや、気もちゃんと使えるし、練習にはちゃんと来るし、マドンの存在だし。いや、それは関係ないかもしれないけど、でも、つまりその　好きなんだ」

そう言い切って俺は一気に唾をぐくりと飲み込んだ。

ドキドキする心臓は徐々にそのスピードを上げていく。まるで公式戦のような心地よい緊張感。今日の試合が走馬灯のように頭の中を流れてくる。今日の打席、チームのために打とうと思ったのに、俺は全然打てなかった。最後の最後まで主将として威厳のないまま

終わってしまった。不安と悔しさが胸のうちで増幅する。今この瞬間も同じだ。大事な大事な試合。ひと区切りつける正念場。女の子から先に告白されるなんて、俺は納得できない。変なところばっかりプライドを持ってしまふ。俺は今、そんな過去の俺にも向き合っている。果たして俺は、彼女の言葉に響く打球を打てるのだろうか。あの心地よい打球音を響かせて、ゆつくりとダイヤモンドを回って、朝子の元へと戻ってこれるのだろうか。いや、打たなきゃいけない心の中で、バットの先を自分からまっすぐに観客の方へ向けるホームラン、打ってみせる。必ず。大きく息を吸い込み、構える。投手は過去の自分。逃げてばかりの変化球野郎。そんな過去の俺の指先から球が放出される。大きく曲がるカーブ。起動を見ぬいて、振り切る。インパクトの瞬間のみ、力を最大限に入れる。一瞬、真空ができる。

「こんな俺でよければ、付き合ってください！」

大きなカーブを芯で捉えたバットを放り投げ、打球の行方を確かめる。ぐんぐん伸びていき、はるか上空を進んでいく。もう少し。もう少し。

「……えっ、いいの？」

「いいに決まってる。むしろ前々からこうなったらいいなって思ってたんだ」

蝉が煽るように鳴く中、朝子は無理やり微笑みながら口を開いた。打球がスタンドに突き刺さる。

「じゃあ……よろしくね」

「よっしゃー！」

俺は思わずガッツポーズをしてしまった。静かな薄暗い川沿いの道に、俺の声が響いていく。山々に跳ね返ってくるその声はまるでアルプススタンドからの声援のようだ。

喜びを隠し切れない俺の横で、それでもまだモジモジとしている朝子。なんだろうと思っていたが、カバンの中から出されたものを見てハツとなった。俺の愛用していた、ファブリーズだった。

「あっ」

「できれば、もうちょっときれい好きになつてほしいなあっていう……。あ、もちろん高橋くんが汗まみれになつて必死で練習してる姿はカッコイイし、そういう汗はありだけど、その、なんとというか、溜め込んだ汗の匂いはちょっと……ね。付き合つて最初の言葉がこれつても悪いんだけどさ」

そう言つてファブリーズを手渡された俺の体からは血の気が引いていた。さすがに申し訳なくなつて、体中にファブリーズをぶちまける。

「いやいや、そういう意味じゃないよ！ あの、そのっ」

「えっ？ あ、ああ、ははっ」

必死に言葉を訂正しようとする朝子と、全身フローラルな香りの俺。なんだか急に馬鹿馬鹿しくなつてきて、笑いがこみ上げてきた。すると俺につられてか朝子も笑いだす。二人の影は徐々に薄くなつてきた。いつの間にか蝉の鳴き声も勢いをなくして大人しくなっている。そのぶん、川のせせらぎがやけに音量を上げて俺ら二人を包み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569ba/>

汗の二オイ

2012年1月6日16時52分発行